

パーフェクトリバティー教団のブラジル伝道

ブラジルで日本の新宗教として知られる教団にパーフェクトリバティー教団（以下、PL教団）がある。同教団も生長の家と同様、信者に占める非日系人の割合は日系人よりも多く、ブラジルの宗教風土に根付いた教団の一つといえるだろう。

PL教団の海外伝道を俯瞰した時、ブラジルが嚆矢となって、やがて近隣諸国やヨーロッパに広がったというユニークな特徴が見て取れる。たとえば北米（カナダ）とヨーロッパ（ポルトガル、スペイン）には、日本人布教師のみならずブラジルで入信した信者が宣教の基礎を築いた。この意味でブラジルは、PL教団が布教路線を拡大するうえでの戦略的高地として機能してきた側面がある。

文化庁編『宗教年鑑（平成25年版）』によると、日本国内の教勢は、信者数約93万人、教師数610人、拠点数262カ所となっている。ブラジル伝道を統括するブラジル本庁による少し古いデータだが、同国における1998年の教勢は、会員数約60万人、教師数約3,000人、拠点数356カ所である。このことからブラジルの活動がいかにPL教団にとって重要な意味を持っているかがわかる。毎年8月1日、大阪府富田林市の教団本部では教祖祭PL花火芸術が行われる。実はブラジルからも多数の信者がそこに参加しており、その存在が国内の信者に信仰上の刺激を与えていると想像することは難くない。

サンパウロ市からリオデジャネイロに向かう途中のアルジャヤ市に、南米聖地と呼ばれる拠点がある。同教団はここを「世界布教の中心」と呼んでいる。1965年に購入され、広さは1,560ヘクタールという広大なもので、教団本部事務所をはじめ、屋外礼拝場、研修・宿泊施設、信者墓地、さらには蘭の栽培場がある。また、日本の教団本部と同様、南米聖地にもゴルフ場が併設されており、PLゴルフクラブは週末、日系企業に勤める駐在員で賑わっている。

PL教団のブラジル伝道が天理教や生長の家と異なるのは、初期の伝道が個人のイニシアティブによってというよりも教団主導で開始したという点である。PL教団のように戦後ブラジルで活動を開始した教団には世界救世教や創価学会、宗教真光などがある。これらの教団はいずれも比較的初期の頃から非日系人伝道に力を入れ、それなりの成果を得たという共通点がある。

さて、1957年、日本の大本庁から教師が派遣され、組織的な布教を開始した。富尾増一はパウリスタ沿線やノロエステ沿線などのサンパウロ州の奥地に広がる日本人植民地で布教に歩いた。また、東良三はサンパウロ市内で布教して、同年12月に同市内の東洋人街として知られるリベルダーデのアパートで拠点を開き、翌年2月6日に市内のジャバクアラに移転して一戸建ての家を布教拠点とした。PL教団ではこの日をブラジル開教記念日に定めている。

富尾は、自らが手がけていた奥地の開拓布教が困難だったため、それを打開するために日本から会員の移民を迎えることにした。そして、1958年10月には第一次PL農業移民の9家族40人がサントス港に到着した。この農業移民は第三次まで続けられた。天理教の場合も同様の趣旨で天理移民が送られてい

るが（本誌Vol.15 No.9）、その第1回目が1957年だったことを考えると、戦後、日本の新宗教において海外伝道の組織的活動が共通する社会的経済的文脈のなかで進められていたであろうことが理解できる。

第一次移民のすぐ後、富尾の後継者として小野久彦が第2号教師として派遣された。彼は、それから後のブラジルPL教団の拡大のうえで重要な役割を果たした。後に触れることになるレシーフェの布教を手がけたのも彼だった。1960年には2代教主がブラジルを訪問。この時に開催された信徒大会の参加者は1,000人を数えた。また、同年7月には第3号教師、翌年にはさらに2人の教師が日本から派遣され、サンパウロ近郊の町に布教拠点が漸次開設された。

1963年は開教5周年にあたり、布教路線がさらに拡大する。ブラジルから日本の聖地への初の団参が企画され、船と飛行機で合計32人の会員が訪日を実現した。また、1964年には、ブラジルの会員らの寄付によってリベルダーデに土地建物を購入し、ジャバクアラから南米本部を移転した。その年末にはそこに七階建てのビルが建てられ、ブラジル本庁とサンパウロ中央教会として使われるようになった。

非日系ブラジル人を対象にした布教が小野の指導によって開始されるようになったのは、この頃からである。新本庁の落成式には「世界布教はブラジルから」との教主からのメッセージが伝えられた。60年代後半には東がアルゼンチンとパラグアイに出張し、約1,000人の入会者を得た。そして、ブラジルの教勢もリオやブラジリアに拡大されるようになった。この頃唱えられた「祖遂断（おやしきり）布教」のための講習会が選ばれた補教師を対象にして行われ、救済を体験した非日系ブラジル人の会員が増加した。1967年には毎月の入会者が500人を数えるようになり、その年4月に行われたブラジル開教10周年記念祭には17,000人の参加者があった。1969年には非日系ブラジル人の補教師が100人を越え、またリオデジャネイロ州で布教が着手された。そして、1973年に行われたブラジル初の教祖祭には南米聖地に3万人の参拝者が集まった。

1976年にブラジル教区長に就任した千葉頼弘は、その翌年から従来の布教活動をさらに活性化させた。彼は広報活動を組織化し、従来の祖遂断布教に加えて、教を日々の生活に実行するという指導を開始した。千葉の就任までのブラジルPLが「奇跡」による「救済」を重視していたとするならば、千葉は「教化」を重視したといえる。彼自身、ポルトガル語の習得に意欲を燃やし、2代教主の著作を中心に翻訳事業を推進した。また、教師の育成教育機関であるブラジル教校を発足させて2世を含むブラジル人教師の養成を手がけ、補教師会を組織して会員による布教を打ち出した。

1977年には、レシーフェ教会を初めとする7教会と18支部が設置された。ブラジル開教20周年を迎えた1978年5月、南米聖地で第6回教祖祭が行われたが、その時には10万人を越す参加者が集まるという教勢の進展が見られた。1970年代末、ブラジル国内に約200カ所の拠点、教師が100人、補教師が2,000人という陣容を誇るようになり、入会者数は30万人を数えたという。